しろうや！ 広島城

Let's know Hiroshima Castle.

№11

ひろしま歴史の小耳　11
（「広島城の50年シリーズ③」）

広島復興大博覧会と広島城

市民により身近な未来の歴史的シンボルの誕生

写真１　広島復興大博覧会ポスター
（『広島復興大博覧会史』から転載）

（１）広島復興大博覧会について

昭和30年代前半、広島では社会基盤が整備され、新しい施設やビルが造られていきました。また、日本全体を見渡しても、第１次高度経済成長、神武景気から岩戸景気へ進む時代でした。世の中がこのような状況であった時期に、広島復興大博覧会（通称：広島博、以下広島博と略す）の開催が昭和32年の3月に正式に決まり、翌昭和33年4月1日から5月20日にかけて開催されました。広島博は戦後広島市で開催された初めての大きな催しであり、連日新聞で状況が報道されるなど、広島中がその様子に一喜一憂した博覧会でした。

広島博の意義は、広島の復興を内外にアピールすると同時に、時代の雰囲気を反映するかのように近代科学産業、貿易、文化の粋を展示し、将来わが国の産業文化の振興に寄与することを目的としていました。

広島博は、3つの会場で開催されました。平和公園・平和大通りは、第1・２会場として使われ、ソ連の人類初の人工衛星スプートニク1号の模型展示など、最先端の科学文化も並行して展示されました。広島城天守閣は、その第3会場となりました。天守閣の復元については、開会式の祝辞の挨拶のなかに、「広島城の象徴である鯉城天守閣の復元をみましたことは意義極めて深く、広島の復興に一大光彩をはなつもの」と表現されたとおり、広島博を象徴するものだったのです。このことは、ポスターの図案（写真１）にも表現されています。（広島城天守閣の建物の再建については、前回の「しろうや!10号」をご覧下さい）。

（２）第3会場郷土館の内容

広島博の第３会場である広島城の天守閣は、歴史と風土、自然を如実に学ぶことのできる「郷土館」として開設しました。展示場は、「外観は毛利輝元が築城した城とできるだけに通っているものの、内部は城特有の陰うつさとは打って変わった陽気さ」（中国新聞昭和33年4月13日朝刊第５面の特集記事）

と絶賛されています。外観の懐かしさと内部の近代化を兼ね備えた広島城天守閣こそ、築城以来の歴史ある広島と復興した広島、つまり広島の過去と未来を象徴する建物だったのです。展示物も非常にたくさんの物が集まったと評価されています。

果たして、この第３会場にはどのような展示資料があったのでしょうか。博覧会の様子をまとめた『広島復興大博覧会史』によると、まず南側の正面玄関には、広島城築城当時に植えられたという大きな柿の木の切り株が広島の歴史を印象付けています。

第１層では、縄文時代から戦前までの広島の歴史を歴史絵画とあわせて展示していました（写真２）。また、毛利輝元画像のほか、文書・刀剣類・茶器・化粧道具などの毛利時代の資料、頼家一門などの書や大名駕籠（かご）・絵巻物・弓矢・鉄砲などの浅野時代の資料、明治時代の大本営関係資料、戦前の航空写真などが所狭しと展示されていました。

写真２　広島復興大博覧会第３会場郷土館
第１層展示観覧風景
広島市公文書館蔵・写真提供

そして、第２層では、広島の風土・自然の特徴を示す地質・鉱物・植物・動物等自然科学の分野の資料が展示されていました。広島デルタの発達の推移やその地質、鉱物の標本、特殊植物の分布、県下の天然記念物の動物などの展示がありました。

第３層では、広島市とその付近の名勝風景をあしらった美麗（びれい）な衣装の展示、第４層は休憩室で、第５層は現在と同じく展望台がありました。

（３）イベント大名行列

広島博をより一層盛り上げるために、博覧会の期間中の5月17日・18日、山口県・萩から大名行列がやってきました。大名行列には、殿様に扮した広島市助役をはじめとして、広島市の幹部も行列の侍に

写真３　広島復興大博覧会時の大名行列の様子
広島市公文書館蔵・写真提供

扮して盛り上げました。写真３は18日に広島城入りをする前に「ゾウリ取り」という催しを披露しているところです。場所は現在護国神社東側にある芝生の広場あたりで、木々の後ろに広島城天守閣がそびえ立っているのがわかります。

（４）市民の感想

「げんばくで、なくなりましたが、昔のままのお城が、このたび出きました。広島のまん中にうき出てるすがたは、とてもりっぱです。お城の中は、郷土館ですから、いろいろな昔のいわれが、たくさんあります。（中略）広島市のふっこう博覧会を見て、私たちは、このような郷土の昔のすがたを見ることができ、大へん勉強に役立ちました。私たちは、今まで、歴史ということを余り、知っていなかったので、明治のころからのうつりかわりが、よくわかりました。又、大昔の日本のようすなどが、絵に書いてあるので、化石などが、どうしてあるのか、わかりました。広島の町も、昔は海だったこともわかりました。このようなことが、たびたびあれば、社会の勉強に役立つだろうと思います。」これは、博覧会をテーマに当時小学生の女の子が書いた作文です（『広島復興大博覧会史』より引用、一部修正）。広島博の時に小学生以下だった子ども達は戦後生まれであり、子ども達にとって原爆によって消えた郷土広島の昔に目を向けるきっかけとなりました。そして戦前を知る世代にとっては、広島城の展示は、戦後顧（かえり）みることの無かった太古の昔からの歴史、つまり原爆以前の歴史を呼び覚ます動機付けとなったのです。

（5）おわりに

このように広島博の時に広島城とその展示が多くの市民を惹きつけたのは何故でしょうか。天守閣は戦前においても、広島市中心部にそびえていましたが、周囲が軍用地に囲まれており、市民に身近な存在ではありませんでした。復興天守閣こそが、市民に開放された都心の公園にそびえる身近なシンボルとして、戦後復興の象徴として、そして原爆によって失われた広島人のアイデンティティの源流として、多くの人々の共感を得たのです。そしてこれらのことが、多くの人々を広島博第３会場へと運んだのです。

折りしも広島では広島市民球場や平和記念資料館、広島県庁など新しいシンボルが生まれてきていますが、広島城天守閣は、これらの施設とは違い、被爆前の国宝天守閣の外観という伝統を纏った、市民に以前より身近な未来広島の歴史的シンボルとなったのです。まだ高層ビルのない被爆13年後の広島、空を泳ぐ鯉のぼりの如く、広島の青空に市民により身近な鯉城の鯱と 甍 がここによみがえったのです。

広島博は、50日の会期に約87万人、一日平均にすると約１万７千人の人が見学に訪れました。そして、その広島博の遺産である広島城天守閣は、広島博終了の翌月６月１日に広島城郷土館という博物館として生まれ変わることになります。

（玉置）

参考文献

・広島復興大博覧会誌編集委員会編『広島復興大博覧会史』1959
・中国新聞昭和33年4月13日朝刊他
・広島市編『街と暮らしの50年』1995

＜予告＞

広島城では、50周年に向けた事業として、「広島城フォトアーカイブズ」と題した写真の公募を実施します。今回掲載したような昔の広島城の写真を募集していますので、詳しくは『市民と市政』かチラシをご覧いただくか、広島城まで直接お問い合わせください。ホームページにも掲載予定です。

展示室でみつけたよ④

かみしもを着てみよう
―体験コーナーリニューアル！！―

よろいやかぶと、小袖を着ることのできる体験コーナーを、この２月10日に大幅にリニューアルいたしました。

まず、畳を敷いて、体験をしやすいスペースを作りました。また、新たにかみしもが登場しました。

かみしもは、「裃」や「上下」と書き、上半身の肩衣と下半身の袴をあわせたもので、江戸時代の武士が登城する際の服装です。大名や上級の旗本は儀式のある日などは、すそを長くした長 袴 をはき、これを「長かみしも」と呼びました。通常は、すそが足首あたりまでしかない半 袴 をはき、これを「半 かみしも」と呼びました。一般の武士は儀式のある日も、この「半かみしも」を着ました。かみしもは通常、上下の色や文様が同じものですが、江戸時代の後期頃から、上級武士には、上下で色や文様が異なる「継かみしも」が許されるようになりました。

そんな各種あるかみしもの中で、体験コーナーには、「半かみしも」をそろえました。かみしもを着て武士の暮らしの一端を感じてみてください。

畳の上でさむらい気分

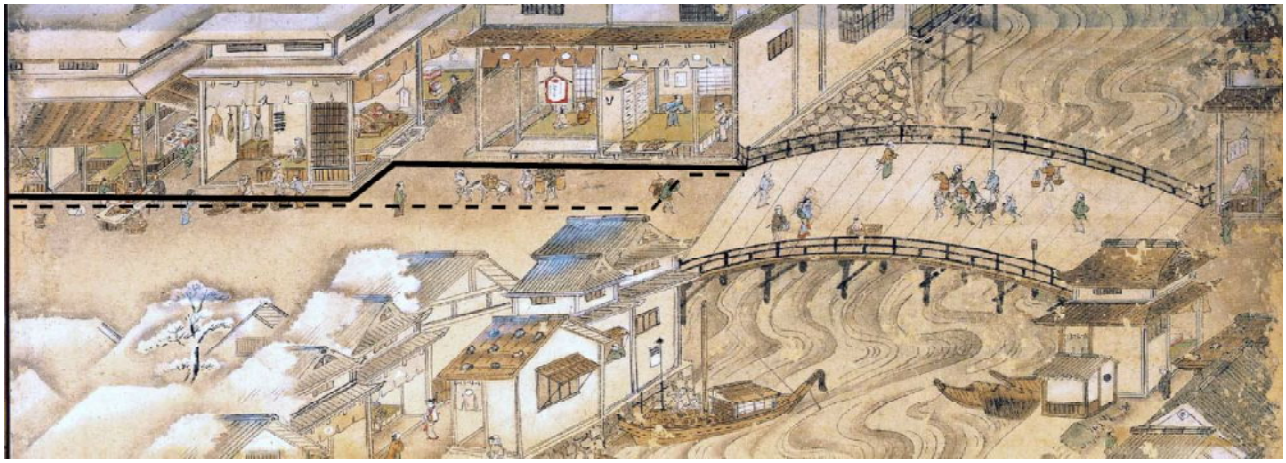
（田村）

広島城下絵屏風を知ってますか？

日本有数の賑やかさを誇った広島城下。その様子を伝える「広島城下絵屏風」には、城下中心部を貫くメインストリートである西国街道沿いに広がる町並みが描かれていて、街道筋に立ち並ぶ店や、活気に満ちた人々の姿などを見ることができます。そして、それだけでなく、今の町に関する謎を解くカギも与えてくれるのです。

例えば！平和公園の西側にかかっている本川橋をご存じですか？　現在、平和公園から本川橋にむかい、そして橋を西方向に渡りきると・あれ？道がまっすぐではありません。右の写真のとおり道が「かぎ型」になっています。いったい何故でしょう？　下の写真は城下絵屏風の部分で、同じ場所を南側から描いています。おや？この絵では橋と道は直接つながっていますよ。江戸時代の本川橋（当時は猫屋橋と呼ばれました）と現在の橋の位置や向きは変わっていないと考えられるので、そうすると道が変わったということになりますね。もう一度絵屏風を見てみましょう。道が途中で「かぎ型」になっている様子がお分かりでしょうか。この道は現在では真っ直ぐになっています。つまり、かぎ型になっていた道が後にまっすぐに直され、その結果、道と橋が直接つながらなくなったと考えられるのです。

本川橋西詰めから西方向を望む



広島城下絵屏風　広島城蔵

実線（――）は江戸時代の道筋で、破線（- - -）は現在の道筋。橋は本川橋

このように、広島城下絵屏風はかつての広島の姿を伝えるだけでなく、現在の広島を知る手がかりにもなる資料です。なお3月24日（土）に当館ではウオーキングツアー「広島城下絵屏風を歩く」を開催予定です。実際に旧西国街道を城下絵屏風に描かれた町並みと比較しながら歩きます。是非、ご参加下さい。

「広島城下絵屏風を歩く」についての詳細は広島城公式ホームページか案内チラシをご覧下さい。応募は3月1日の午前9時から電話で受付けます。先着25名です。　（本田）

しろうや！広島城

編集・発行

財団法人広島市文化財団　広島城

730-0011

広島市中区基町21-1

電　話　：082-221-7512

ＦＡＸ　：082-221-7519

平成１８年２月　日発行

広島城利用案内

開館時間：９：00～18：00

（12月1日～２月末日までの平日は９：00～17：00）

入館の受付は閉館の３０分前まで

入館料：大人３６０円（２８０円）

小人１８０円（１００円）

（　）内は３０名以上の団体料金

休館日：12月29日～1月２日

ホームページ：http://www.mogurin.or.jp/rijo.html